

学童疎開

昭和19年になると戦局はますます悪化し、大都市への空襲も予想されるようになった。3月3日の閣議は、決戦非常措置要綱を決定し、一般疎開（建物疎開、人員疎開、施設疎開）の促進を計った。

東京都はこれをうけ19年3月10日に教育局長より各区長に対し「学童疎開奨励ニ関スル件」として学童の縁故疎開をうながした。さらに縁故のない学童のために疎開学園を設立した。しかし疎開学園は多数の疎開希望者に応じきれず、一層強力で縁故疎開を勧奨するとともに6月30日の閣議で大都市に残った国民学校の児童に対して集団疎開を行う事に決定した。

つまり空襲が予想される大都市のおとな達が安心して防衛に従事できるよう、また次期戦力になる子どもを戦禍から守るためである。

都では各省庁と連絡をとりあい輸送関係（児童及び荷物）、食料、生活必需品等の配統制物資の受け入れ県への割りふり等を決めていった。また父母に対しては疎開解説をした要項の配布や都政週報、隣組回報等を配布して協力を求め、集団疎開の準備が着々と進められた。

疎開の準備

空襲が多くなるにつれ疎開希望者もふえていった。父母は学校に集団疎開の申し込みをし、学校は集団生活に適するか調査し、ひどい病弱であるとか、甚だしい欠陥を持っていない限り適格者として連れていった。費用は学童一人につき月10円を父兄が負担し、残りは都が負担した。江古田小では疎開児童後援会を作り一人当たり3円ずつ集めて疎開先の費用にしたと記録されている。また「家族で写真館に行き記念写真をとった」（啓明小）という話も当時の親子の覚悟をよく表わしている。

親は次のような品物を用意して子どもを送り出した。

- (1)寝具 掛布団1枚、敷布団1枚、敷布1枚、枕1個、毛布等。
- (2)衣類 寝巻、下着、シャツ、ズボン、猿又(男)、ズロース(女)、靴下、足袋、腹巻、モンペイ、防空頭巾等。
- (3)日用品 食器、手拭、ハンカチ、塵紙、歯刷子、歯磨粉、水筒、コップ、通信用紙、石鹼、フキン、雑巾、マスク、糸、針、櫛(女)、古新聞紙等。
- (4)履物 下駄、運動靴等。
- (5)其他 教科書、学用品等。

挙げて見ると、大分色々な品物がありますがそれも決して無理に調べねばならぬものとお考えになる必要はありません。

〈「東京都戦災誌」より〉

戦場となってしまった都市は、もはや子どもたちにとっては、安全な生活の場ではなくなった。

空襲の心配のない農村地帯に向けて子どもたちの集団大移動が始まったのは、19年の晩夏であった。翌年には、中野のまちに子どもたちの姿は、ほとんど見られなくなる。

親元を離れ、慣れない土地で厳しい集団規制生活を強いられる子どもたちは…



●疎開先のお寺の門前で（福島県夏井の専称寺にて桃園第二国民学校）〈郷達彌氏提供〉

中野は長野県に

中野区では8月初旬に区長と校長と後援会長（奉仕会長）が協議し、区南部の各国民学校は長野県へ、区北部の各国民学校は福島県へと割り当てた。こうして8月末から9月にかけて第一次集団疎開として国民学校学童の3～6年生まで約7,800名が疎開して行った。

6年生は翌年3月卒業のため帰京した。その数2,246名（福島県1,165名、長野県1,081名）と記録されている。

6年生と入れかわって新1～3年生までが、3月末に第二次疎開を行った。さらに空襲の激化により、事情があって疎開していなかった者を強制的に疎開させる第三次疎開が4月～7月に行われた。これは各学校とも数人の少人数であった。

また疎開地が大火や空襲の危険にさらされたため別の土地に再疎開した学校も数校あった（桃園第二、北原、新井、啓明、上高田国民学校）。こうして終戦をむかえ、20年10月末から11月にかけて全員帰京した。

縁故疎開

東京都の学童疎開対策はまず縁故疎開の促進によっではじめられた。地方に親戚や縁故者のある者はそれをたよって疎開していった。学童の縁故疎開について詳細は不明であるが、19年4月には1,731人縁故疎開しており、また20年10月10日調べの縁故疎開帰京者数は6,629名と記録されている。まだ残っている者等考えるとこれ以上の人数が縁故疎開したと考えられる。「集団疎開していった子どもより遠くの親戚に預けられた子どもの方がよみじめでつらい生活をした。一人でもあり全て、親類、学校等とたたかった。人によっては集団疎開よりつらかったのではないかな……」と語る人もいる。



●疎開先の山本屋さん付近でみんないっしょに
(20年長野県上諏訪にて 神明国民学校)〈諏訪市役所提供〉

残留組

学童疎開が着々と実施されていったが、家庭の事情や身体の弱い子等各国民学校で15~50人位ずつ残った学童がいた。最初の頃は、残留児童を1クラスにし学校で授業をしたが空襲が増すにつれ寺小屋式授業にし教師が巡回指導する型をとるようになった。しかし空襲が激しくなると子どもたちはほとんど出てこなくなった。

野方小では約50名が残留し、学校、満願寺、野方の民家で寺小屋授業を行った。

教師も小さな子のいる女先生等が残留し宿直をして学校の警備にあっていた。空襲時には書類を防空壕に入れ、その後自分も入り震えていたということだった。



●女の子の疎開嫁入道具(19年桃園第二国民学校)〈郷達殖氏提供〉

区内疎开学童数一覧

■中野区の児童数 (18~20年度は不明)(参考:17年度28,169名)

■中野区疎開児童数 約7,800名

(長野県3,582名、福島県4,184名、山梨県71名)

●19年4月1日までに縁故疎開した児童数

初1	初2	初3	初4	初5	初6	高等科	計	学級減数
7,612	15,555	15,290	13,402	12,617	10,282	2,455	77,213	
330	347	242	291	276	111	24	1,731	12

「東京都戦災誌」「中野区民生活史 第二巻」太字は都内35区の内

●20年6月末現在疎開児童数

福島県	長野県	山梨県	計
2,147	2,860	71	5,078

「東京都戦災誌」

●20年10月10日調 国民学校児童数

集団より帰京	縁故より帰京	現在帰京数	計
4,710	6,629	4,690	16,129

「東京都戦災誌」

●20年3月帰京者 集団疎開初等科終了学童輸送に関する調

	福島県	長野県	計
児童数	1,165	1,081	2,246
職員数	44	42	86
計	1,209	1,123	2,332

「東京都戦災誌」



●山寺の朝。早寝早起き、規則正しい生活であった 〈同上〉



●遊びもグループで（19年福島県夏井専称寺にて桃園第二国民学校）
 <郷達殖氏提供>



●待ちに待った手紙や小包が届く（同左）

学寮の生活

19年8月末中野駅から2～3校ずつ子どもたちは各疎開地に
 出発した。宿舎には寺院、旅館、練成所などが当てられ、50～
 100人位ずつ宿し教師、寮田各1～2名がつきそつての集団生
 活が始まった。

賄については宿舎の経営者が請負うか地元の協力を得て直営
 にするかの方法がとられ、寮田についても現地で採用されるな
 どした。

学寮生活は日課表にみられるように朝起きて寝るまで全て規
 則で決められており、また規則保持の組織として日直、週番、
 班長などがおかれ軍隊の子ども版のようであった。

日課表に見られる消灯就寝時間が早い点や演芸会などは父母
 と離れて暮らす幼い子どもの望郷の念を和げようとする配慮で
 であろうか。子ども達の共同生活において必然的にボスと呼ばれ
 る者ができ他の子ども達を牛耳るということも行われた。



●体力増強のために、体操は欠かさない（同上）

日課表

- 一、毎日の生活
- 五・三〇 起床洗面直ちに清掃
- 六・〇〇 朝礼 男子は宿舎裏の三和神社境内
 女子は宿舎前の道路にて
- 六・三〇 朝食
- 七・一〇 登校出発
- 午後 下校後 三・四年復習
- 五・三〇 夕食
- 六・〇〇 復習 五・六年
- 八・〇〇 就寝 暫くして消灯
- 当番勤務は、週番・食事・清掃の各当番一週交替
- 学校よりの注意及び宿舎に於ける注意は朝礼時又
 は就寝前、一日の反省の時に之をなす。
- 二、休日の予定
- 1 午前中は復習
- 2 午後は作業、外出、見学、家庭への通信
- 毎週土曜日は午後六時より農業会に於て全団員慰
 安会を催す。

『40年のあゆみ一記念樹一』（中野区立多田小学校）

●境内の掃除、藁草履をはいている（同上）



※学童疎開実施結果については、本書発行後に判明等があった場合は下表について追加・修正等していません。最新の学童疎開調べについては、中野区ホームページ「学童疎開」のページに記載しています。

中野の学童疎開

学校名	疎開地(児童数)	宿 舎	疎開先学校	疎開期間	備 考
桃園第二小 (508)	福島県 石城郡 大野村 (369)	金波旅館、玉山湯ノ口、玉屋、 石屋旅館、藤屋	大野第一小	19・8・28～(20・5)～20・10・21	5月南会津田島へ再疎開
〔再疎開〕 (204)	夏井村 (90)	専称寺	夏井小	19・8・28	3月南会津田島へ再疎開 4・5年
	平市 (49)	ときわ亭等	平第四小、平第一小	19・8・28～(20・3)	
	耶麻郡翁島村 (69)				
	南会津郡檜原町 (51)				
	田島町 (84)				
野方小 (338)	福島県 伊達郡 飯坂町 (127) 半田村 (66) 桑折町 (145)	大芳寺、定龍寺、歆喜寺 無能寺、伝来寺、法円寺	飯坂小 半田釀芳小 釀芳小	19・9・1～20・10・21	3～4年生 5年生 6年生
〔再疎開〕	睦合村、伊達町				
江古田小 (519)	福島県 石瀬郡 須賀川町 (210) 田村郡三春町 (232) 御館町 (72)	長祿寺(第一尚和寮)(80)、長松院 (第二尚和寮)(90)、勝誓寺(第三尚和寮)(40) 龍音寺、紫雲寺、他(寺院1、旅館2)	須賀川第一小 三春町小	19・9・1～20・10・29	女 20・2 6年生帰京 20・3・26 第2次疎開児出発 男 20・3・10 6年生帰京 20・4・26 第3次疎開児出発 20・7 第4次疎開児出発 男女
鷺宮小 (280)	福島県 石川郡 浅川町 (70) 東白河郡竹貫村 (77) 石川郡石川町 (133)	染屋旅館、白川屋旅館 龍台寺、山田屋旅館、屋見屋旅館	浅川小 田口小	19・9・2～20・10・20	
東中野小 (301)	福島県 箕輪			19・8～	20・5戦災により全焼。復旧せず廃校。(現在の東中野小とは別)
上高田小 (425)	福島県 双葉郡 富岡町 (90) 広野町 (90) 浪江町 (157) 久之浜町、大久村 (88)	亀屋旅館、大車館 若松屋(35)、仲屋旅館(25)、鶴屋 旅館(30) 石川屋、田村屋 ほてい屋	富岡第一小 広野小 久之浜小筒木原分校	19・8・31～(20・6・23)～20・10・21 20・6・23～20・10・21	6月23日川沼郡野沢町へ再疎開
〔再疎開〕	川沼郡野沢町				
啓明小 (573)	福島県 石城郡 湯本町 大沼郡高田町、本郷町、 新鶴町、尾岐村	松柏館、葛本旅館、つたや旅館、 昭和館、山形屋、佐乃屋、吹の湯、谷の湯	湯本小	19・8・28～(20・6・24) 20・6・24～20・10・2	6・24日高田町、本郷町、新鶴町、尾岐村へ再疎開、20・4・26第2次疎開児出発 高田町1・2年、本郷町3年男女、5年女、尾岐村6年男、新鶴町、6年女、5年男
〔再疎開〕	新鶴町、尾岐村				
新井小 (430)	福島県 石城郡 植田町 (239) 勿来 (91) 泉 (53) 磐崎 (47)		植田小	19・9・1～	
〔再疎開〕	耶麻郡吾妻村中ノ沢	西村屋、花之屋			
北原小 (381)	福島県 石城郡 磐崎町 (167) 江名町 (214) 小名浜 河沼郡 柳津町 大沼郡 西方村、宮下村	かげの湯 国元館	江名小	19・8～(20・5)	20・5月河沼郡柳津町へ再疎開
〔再疎開〕	柳津町				

実施結果調べ

学校名	疎開地(児童数)	宿 舎	疎開先学校	疎開期間	備 考
大和小 (348)	福島県安達郡小浜町(179) 安達郡油井村(70) 信夫郡信夫村 水保(99) 保原町桂沢(70)	大谷屋(第5学寮)(50)、伊藤酒店、 西川屋(第6学寮)、松屋、相川屋 (第7学寮)(13)	小浜小 油井小	19・9・4～	3・6年 小浜大火のため油井へ再疎開 1・3・4年 6年生民家への分散宿泊
[再疎開]	油井村				
桃園小 (318)	長野県上伊那郡伊那富村 三義村 高遠町 美和村(50) 伊那里村(50)	長久寺(58)②、明光寺○は職員数 山室磁泉・元湯旅館(男・55)① 矢島旅館(女43)② 建福寺(5女43)①、満光寺(4女30)① 桂泉院(4男22)、峯山寺(3男17)① 蓮華寺(5男50)① 常福寺 円通寺	伊那富小 美和小 伊那里小	19・8・23～20・11・20	3年男女 20・4・12第2次 6年 20・2・18 卒業のため帰校 20・4・7 第2次疎開76名 20・ 第3次疎開16名
桃園第三小 (521)	長野県上伊那郡東箕輪村(98) 中箕輪村(272) 箕輪村(53) 美篤村(51) 東春近村(47)	長松寺(59)、普濟寺(39)、無量寺(78) 嶺頭院(72)、養恭寺(39)、明音寺(80) 澄心寺(54) 吉祥寺(51)② 光久寺(48)	美篤小 東春近小	19・8・23～20・11・12	20・3 6年生帰校 20・4 第2次疎開 3～6年 20・ 第3次疎開59名
神明小 (474)	長野県諏訪市上諏訪 南佐久郡	吉田屋別館、吉野屋、大和屋、寿、 山田屋、小島屋、玉川館、山本屋	城南小	19・8・23～20・11	20・4 第2次疎開、20・6 第3次疎開
谷戸小 (396)	長野県諏訪市上諏訪(134) 中州村(174) 宮川村(88)	桔梗屋等 大和館	高島小 中州小 宮川小	19・8・28～20・11・17 19・8・28～20・11・11	20・2・23 6年生帰校 3・4年女子
本郷小(462) [再疎開]	長野県諏訪市上諏訪町 本郷村、湖南村	富貴の湯旅館、竹ノ湯旅館、 諏訪旅館、喜楽館、 高栄寺、善光寺	高島小 湖南小	19・8・29～(20・3) (20・3)～20・11・15	20・1 第2次疎開
新山小(265)	長野県諏訪市上諏訪	龍東館等	高島小	19・8～20・11	20・2・25 6年生帰京※20・5 震災により 全焼廃校。(現在の新山小とは別)
塔山小 (420)	長野県諏訪市下諏訪町(205) 長地村	菊本、中川、みなと屋、富ヶ丘 平福寺(4年・92)、神の湯(6年・126)	長地小	19・8・28～20・11・6 20・11・23	3・5年 20・4・25 第2次疎開(1・2年) 20・2・13 6年生帰京、20・4・2 新6年生下諏訪より
向台小 (240) [再疎開]	長野県岡谷市 川岸村 長地村	千鳥園(91)、照光寺(46)、立正閣(48) 昌福寺(53) 横川公会堂	小井川小、岡谷小、 中央小、田中小	19・8・23～ (20・7・31)～20・11・7	千鳥園、照光寺の児童80名、横川の公会堂へ 再疎開(長地小へ) 縁故疎開653名、残留児童629名(S19・8月)
仲町小 (371)	長野県 片丘崖湯			19・8・28～20・11・9	
多田小 (173)	長野県上伊那郡赤穂町 山梨県	農業会館(100)、竹島屋(32)、北沢館(45) (第2次)、下平一心館、倶楽部 恵林寺(71)	赤穂小	19・8・23～20・10	20・4・24 第二次疎開 桃園小(男20・女5)・多田小等

ざってホーホケモと鳴く聲気がさっはりした。歸りは木を引いて長地板まで歸った。

五月九日(水)晴

今日も山だった。急いで春宮に行ったが、おくれまわった。でもみんなの後をついて行った。赤松の入口まで二度木を運ん来た。一かも小雨が降り、どひひわいて水がびしょ。とても苦しかった。働いてゐる時は暑いが止ると寒かた。

五月十六日(土)晴

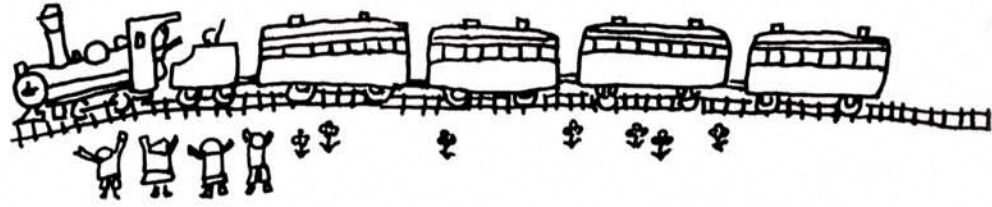
本當は豆まきだった。たが塔川の生徒は、二時間目はお裁縫室のとなりで長地の校長先生におひな様のおはなしを聞いた。きれいにござったひな壇は東京から疎開して来たのだ。

三、四時間目は、まき運びで運動場にある小さな棒を運んで来て裏庭に、みかさ畑汗たぐいで働いた。お晝過ぎは同じ裏庭で草取り及びお掃除を、一寸いぶん働いた。お風呂に行いた時、お父さんに寸合してその時中野や神田に電話を掛けし、ばらぐりて別館に来て下さった時中野の内に焼けたと、心事を聞いた。そしてすぐ夜行で歸るといになり、晩は衣類や荷物の整理をしてもらって、暗い外で、雑草茶良をして別れた。

志平依久子



- (注)
- (1) 広い運動場の東側は桑の皮をゆでる湯気が立ちこめていた。運動場は全校生徒を動員した桑の皮むきの大作業場となっていた。桑の皮から丈夫な繊維がとれることはきかされた。でも何に使われたのか知らない。毎日毎日の作業はつづいた。
 - (2) 山で伐採した長さ2m程の木材につなをつけて、ふもとまで引っぱってくる作業には、6年生の女子も出動した。近年のハイキング道とちがって荒れた細い山道だったので、何時間もかけて不器用に材木をひきつりおろす作業は大変なものだった。時には二住復もしたけれど、勤労奉仕に弱音をはく子はいなかった。
 - (3) この日未明、東京大空襲があって中野一帯は一夜にして廃墟となってしまった。子供達には6月1日になるまで正式には知らされなかった。しかし全く知らなかったわけではない。子供達に動揺をおこさないようにという先生や寮母さんの配慮があったのか、子供達に事実がつかめなかったのか、あるいは、日本がやられたということは知って知らぬ振りをするのが少国民の姿勢と思っただのか、とにかく、日記には何も書かれていない。



萬さんのこと

東中野の駅を南に百五十米程いったところに、「一呂」というささやかな和菓子やがあった。店先にほんの少し和菓子が並んでいたようなひとけの少ない薄暗い店で、その店先にじみなおねえさんが坐っていた。それが私達とあの一年半をともにした寮母さんの萬さんであった。考えてみれば二十歳をすぎたばかりのおねえさんだった。でも、おしろい気のない四角い顔、大がらなからだ、いつも、かすりのモンペ姿だったおねえさんは、私達の母親の雰囲気充分であった。子供達の頭のシラミを一人づつ、すきぐしでとっていた萬さん、縫目にシラミが並んでいるシャツを毎日手で洗っていた萬さん。夜、みかん箱の机で漢字の書取りを手伝ってくれた萬さん。「勝つまでは」の気負いを強いられていた「少国民」がタタミの雑居部屋に帰ったとき、萬さんは軍歌とは全くちがう歌をうたつてきかせた。

「明日はお立ちか、おなごり惜しや……」
 「山の淋しい湖に一人きたのも悲しいところ、胸のいたみに耐えかねて……」
 「野崎まるりは、屋形ぶねで詣ろう？」

カサカサの「少国民」達の心にそれは、とてもとてもみずみずしく、そして少女達の心に芽生えはじめていたはずの情操をかきたてた。情緒に飢えた少女達は一言一句すぐに憶えてしまった。それらの歌こそ五十歳をすぎた私達のほんとうの「懐しのメロディ」なのです。

終戦と少国民

五月二十五日東京大空襲で急いで東京へもどった父から、一通の便りもなく夏になった。焼け出されて終戦をむかえ、子供に便りをかく余裕はなかったにちがいない。けれども疎開の子供達の生きる力は、親許に帰ってごはんを食べる夢に支えられていた。毎日毎日、郵便受けをのぞいては失望した。家族は生きていないのではないかと何度思ったことだろう。もし一人になってしまったら、何よりも食べる夢がきえてしまう。それは限りなくおそろしいことだった。親と食べものは一つのものであった。

ある夕方、家族あてに出した私の手紙はもどってきてしまった。暗い絶望の夕暮れだった。私はとうとう一人になってしまったと思ひ込んだ。班長の私は決して人前で泣かないことになっていた。強く正しい少国民の模範でなければならなかった。誰にも黙っていたが涙が流れて仕方がなかった。

〔ある少女の集団疎開日記〕より

ある少女の 集團疎開日記

昭和二十年

五月一日(火)晴

たうく五月に入った。朝食の時終らない内に登校の笛が鳴りてしまった。急いで支度して出たが充文まに合った。一時間目は桑の皮むきでも近頃ちともいれではない。夜うた會をした。私はふるさとのうたをうたった。

五月三日(水)雨

第一時間目新しい修身の本に入り御勅語を一人づつ奉讀した。六時間目音楽の時「敷島の」の歌を習った。遊び時間高等料のとても太ったデフヤアがゴムを飛ばしたらゆひがへこんで、わけてしまったのは驚いた。私もあんまりに太りたいなあ。

五月八日(火)晴

七時春宮集合なので起床は五時だった。四年以下は間があるの朝もうでに行つた。六年生は急いで春宮に行き、そこから神の湯の前の方をずっと行って赤森山へ行木を引いて来て入口のところまで来ておぼんたうをいたゞいたが寒くて仕方なかった。谷川の音はま



疎開日記のことへ後日記(昭和五十五年記)

石川依久子(旧姓志平)

はじめの日

父兄会から父が帰って来た。夏のはじめだったと思う。半年前に母が死んだので、不馴れな父が何度か昼間の父兄会に出席していた。大人達の間で、重大で深刻な話し合いがなされているらしいことを何となく感じて、その日も父の帰りを待っていた。帰るなり父は「集團疎開にきめてきた」と私に言った。行く気があるかないかなどということとは、いっさい聞かれた記憶もない。子供の意志など聞く時代でもなかったが、子供達に迷いを持たせまいという気持があったのかも知れない。父は簡単に書かれた下諏訪の地図を私にみせた。「この湖のそばの旅館に行くんだよ。」と教えてくれた。私はある興奮を感じていたけれど、とりわけ悲しいとも嬉しいとも思わなかった。ただ、日本中に異様なきんちようがおしよせて来ているのをじっと感じていた。

ボスと食べもの

子供達の生活の中には常に「食べる」ということが最大の関心事であったからボスの存在も食べることに繋がっていた。いじめられるということは、即、ほされるということであり、貢ぐということは食べものを減らされるということであった。四十年後の現在の「いじめっ子」と根本的にちがうことは、食べることへの必死の執着から強者と弱者が生まれたことだ。

弱者の精神的苦痛は耐え難いものだった。まず逃げ場がなかった。寝るのも食べるのもみんな一緒だった。そしてそれがいつ終わるといってもなかった。更に、ほされて飢えて死ぬかもしれないという潜在的な恐怖があった。ボスに抵抗して飢えて死ぬよりは、という計算のもとにわずかの分け前をボスに貢ぐことになった。ひそかに手紙で親にすくいを求めた子供達もいたかもしれない。しかし手紙はいつも検閲をうけていたから、お互に泣きごとを書かないで前になっていた。

先生達が、こういう成り行きに対してみてみぬ振りをしていただけでもない。日記の一部に、「先生からAさんのことについていろいろなおはなしがあり、借したものと調べた。」と書かれてあり遠まわしに、そのことを語っている。先生達はおそらく、「おまえ達少国民はみんな仲良く協力して日本のためにがんばらなければならぬ」という訓戒を与えたのではないだろうか。



大和国民学校の疎開学童たちの、ざつくばらん回想録

大和国民学校学童

出席者（匿名希望）

当時3～5年生、男女計5名

疎開先は、福島県の小浜・油井・信夫地区



子どもたちはハイキングにでも行くよ
うな気持ちで喜んで出発した（19年）

遠足気分のスタート

● ぼくが集団疎開に行ったのは国民学校4年の時なのですが、行く前に学校でいちばん強烈だった先生に猛烈に仕込まれまして、その後で疎開に行ったものですから、かなり楽な面もあり、団体生活にも慣れやすかったということはあったと思います。少しの間ですが、級長やったりしたものですから、全体意識のようなものもありましたし。

ですから最初に集団疎開の話があった時に、みんなが行くのならばくも行くというような気持ちが働いて行っちゃった。これが今残る一番の不満なんです。みんなが行くのには自分だけ仲間はずれになるのはイヤだという。当時3分の2位行きまして、あとの3分の1は家庭の事情などで残留でしたが、この残留というのがすごく除け者になっ

たような感じがしたんですね。

● 出発の日のこと今でも憶えています。夕方学校の校庭にみんなが集まって、子どもたちはハイキングか旅行にでも行くような気持ちになって。

● もう空襲もあちこちで始まっていたから大人たちは、これきり逢えなくなるのではないかと思

っているから、子どもたちの顔をのぞきこんで、体に気をつけるのよ、などと言っている。子どもの方はウキウキして、それからどうやって上野駅まで行ったのかも覚えていないの。でも、ほの暗くなった校庭の情景だけは今でも憶えている。（注）大和国民学校の第1次疎開学童は9月4日の午後、校庭に集合してから出発した）

● 安達駅まで10時間位かかって行ってるのね、今なら2～3時間だけれど。

● 9月5日の朝でしょ、着いたの。だのにととても寒くてね。

● 着いたらまず最初に、お金は全部出しなさいと。親は何かの時にと、腹巻や下着にまで縫い込んでくれていたけれど。

● とにかく個人が所有してはいけないのよね。お金も、お菓子も、食料も。

● みんな没収。小包が時々来るんだけど、みんな検閲されて、自分のところに来るのはボロボロになった日用

品のようなものだけ。いいものは全部とられてるような気がしてしょうがなかったです。

● 一度だけどうも検閲にもれたらしくて、父が航空兵だったものだから航空食というのがあって、今で言えばガムかチョコレートのような格好をしたものなんだけど、食べ物だとは思わなかったんでしょうね。着物の間にはさまったまま渡されたことがありましたけど。

● 面会だって、直接生徒には会わないの、絶対に。もう軍隊と同じですよ。

● 軍隊の小型ね。

● 今考えると、子どもですからよほど規律を正していなければ団体生活できなかつたんですよ。

● それに夜逃げというのもあったから。上野までたしか5円でした。どこをどう目をくぐったのか5円玉だか5円札だか持っていて、夜抜け出して駅まで行った子がいたの。何しろ私たちのところ（注）相川屋）は駅のすぐそばだから。でも駅ですぐわかるのね、疎開の子は。で寮母さんが飛んで行って連れて帰ってくるの。

● ぼくらの信夫でもありましたよ。吊り橋があったでしょう。あの橋をダアと逃げて行くと、それを旅館から見ている、「ああ誰か逃げた」。すると何人か選ばれてすぐ追いかけるわけ。ところが追いかけて行った方が帰りたくなって……（笑）。

これは、当時国民学校3～4年生であった、いわゆる少国民たちの数十年を経て語る「疎開生活」の断片である。

中野区内の国民学校の疎開児童は北部は福島県、南部は長野県に割り当てられ、19年8月末から20年11月までのおよそ1年3カ月をその地で過ごしている。その生活は各地によって幾らかの相違はあるにしても、その大要はほぼ同じであったと思われる。



毎朝食事の前に、みんな揃って乾布摩擦。これはどこも同じであった。(20年福島県夏井桃園第二国民学校) <郷達殖氏提供>

- まだあの頃は単線だったから、上り列車が来るとポイントが動くのね。それを教えてもらってからは、ああ上りだ、上野行きだ。汽車が煙をはいて通る。それをみんなで見つめているの、手すりにつかまって。そのうちエー、エー泣き出す(笑)。
- 私たちは駅からバスに乗って連れて来られたから、帰りたくてもどうやって帰ればいいのかわからなかったから、毎晩泣くだけ。
- 遠足気分の抜けた3日目頃から、だいたいホームシックにかかったみたい。
- 誰か1人泣き出すと、ダアーと広がって。

乾布摩擦とおじぎとボス

- 学校から帰った後、何してたのかなあ。
- 19年と20年になってからでは生活の内容もずいぶん違って来たでしょう。
- 19年の頃は、まだぼくらは小浜でした。火事で焼ける前ですから。(注)小浜では、20年1月15日の深夜、火事になり、150名の疎開学童が焼け出され、各所に分散された。学校から帰ってくると1時間ほど復習と予習をして、それからもう自由行動でした。裏山に行っているいろいろなものを取って来て、その草をだんごに入れて食べたり。
- 最初の頃はよかったです。地元学校へは通わないんだけど、結構

子どもたちと仲良くなって、その子らの家にもぐりこんでおイモなんかふかして食べたり(笑)。

- 洗濯などした記憶はあまりないのね。
- 洗濯は寮母さんがしてくれていたから。でも今考えるとあれだけの子どもたちの洗濯を1人や2人の寮母さんが、手で洗ってくれてたんでしょう。これだけでも大変なことね。
- 掃除はよくさせられましたね。
- 自分の部屋だけだけだね。
- ぼくらの方では、6時起床、すぐみんな裸になって一斉に乾布摩擦です。
- 健康タワシというのがあって、それでこするんです。
- あら、そんなのなかったわ。手ぬぐいだったわ、私たちは。
- 寝る前にそのタワシを枕元に置いて寝たもの。朝すぐ使えるように。
- 要領がよくなると、掛け声だけでやらない者もいたりして。1・2、1・2と寝床の中から声がある(笑)。
- それから東京の方に向かって天皇陛下におじぎして。
- 寝る前も「お父さん、お母さんお休みなさい」と。とにかくおじぎすることが多かった。
- で乾布摩擦が終わると、ぼくらのところは山へマラソンに行くんです。今で言えばジョギングですね。軍歌を歌いながら帰ってきて、食事。
- また宮城に向かって「お父さん、お母さん、ありがとうございます」。

- 朝礼になると、また宮城に向かって遙拝。
- 奉安殿に向かって最敬礼。
- 1日の行動は全て班が基準になっていて、
- 小分隊ですね。だいたい7～8人位の。
- ぼくらのところでは、だいたい8畳間に6～7人位だったかな。
- それは大分余裕のあった方じゃないですか。私のところでは13人が8畳



ここに行きます 最初に父兄に渡された大和国民学校の「集団疎開の葉」の中に記された案内図(19年8月) <斉藤陸子氏提供>

位のところにいましたよ。

- その班には班長がいるんですけど、それは表面上の号令を掛ける者、実際はその後に黒幕がいて、これがすごい。ボスです。
- あれは、今思えばシャモの世界ですね。強い者が絶対なんです。
- 絶対君主制ですね。



どんなに空腹でも動きたい年頃。原つばでの騎馬戦は大好きなゲーム
(19年福島県夏井の専称寺にて 桃園第二国民学校)〈郷達殖氏提供〉



「はい郵便ですよ」
手紙が何よりの楽しみ
(同左)

● 食料の上前ははねるわ、いやな仕事は押しつけるわ。

● 女だけや男だけの場合と混合の場合とではぜんぜん違ったみたいね。女だけの場合は、まるで卑弥呼です。貢物をしないと生きていけないの。

● 男だって同じですよ。一番下についた者はみじめなものです。

● 一番上に出た人間は1カ月位でひっくり返っちゃって一番下につく、すると2番目の者が1番になる、それもまたひっくり返る。早い人は1週間でひっくり返っちゃう(笑)。それはどういうことで落ちるかと言うと、まず食事ですね。

● そうそう。ボスが誰かに命令するでしょう、それにその人が服従しないで黙っているとそのムードが全体に広がって、そのボスは自然に権力が失墜するわけ。それは、今まで余分に食べたもの全部返せということですから、ぜんぜん食べるものがなくなってしまう。

● みんなが眼光らせているから、自分から食べるのをやめるわけです。お腹が痛いとか何とか言っって。

● 先生や寮母さんに聞かれると、お腹が痛いからだと言わなければならないとみんな暗黙のうちに了解しているのね。

● 野菜の買い出しに行っても2人分も3人分も持たされる。空っ腹で。まさに徹底的に奴隷ですな(笑)。

● そんなことで結局、半分位の者が

脱落してしまいましたね。みんな縁故疎開でどこかへ……。

- とにかくいじめはすごかった。
- 暴力も多かったですよ。便所に行



油井の疎開先から兄へのハガキ(6年女子)。詳しいことや真情は書かない書けない時代であった。(斉藤陸子氏提供)

って帰ってくると、部屋に入ったとたんに、バーンと布団かぶせられて、もうめっちゃくちゃ。

● 集団疎開で一番いやだったのは仲間はずれにされることだったなどとよく言われるけれど、ぼくらの場合は、そんな生やさしいものではなかったです。

● 一切食べられないんですから。この恨みはすごいですよ。私は東京に帰ってきてから、つるし上げましたね。それこそ腹の虫がおさまらないわけです。

夜逃げも班責任

● 食べ物がなかったからよけい恨みが骨髓にしみちゃったのね。

● 20年の4月以降すごく食糧事情が悪くなったでしょう、するとボスなんかなくなったところもあるんですけど。結局、ボスができるのは、まだモノがあったという証拠かもしれないわねえ。

● でも制裁もひどかったね。

● 夜逃げ出して連れもどされると、それですむということはぜったいにない(笑)。

● お前、どうして班の名を汚したと(笑)。

● ボカボカッとやられちゃう(笑)。

● ですから、何とかして縁故疎開にしてもらおうとするんだけど、その手紙が検閲に引っかかって届かない。

● たまたまた村の人に手紙頼んだりしてやっと手紙が届くと、親もこれではかわいそうだからと引き取りに来る。すると今度はぼくらが木刀持って向かって行くだ、何で引き取りに来たんだと(笑)。

● すさまじいわねえ、男の人たちは。

● 長野県の方に行った人たちの話を聞くと、わりあい自由で、検閲もそれほど厳しくなかったみたいよ。

● なぜか、われわれの方は厳しかった(笑)。

● 私たちのところでは、火事の後で編成変えさせられて、学寮が変わった



自由時間には、本を読んだり…（19年専称寺にて 桃園第二国民学校）
〈郷達殖氏提供〉

でしょ。環境が変わっちゃったものだから、おねしょする子がいたの。

- ああ、おねしょなんかするともう徹底的にいじめられるね。
- 制裁にもいろいろあって、押し入れに布団積むでしょ、その積み方がちょっとでも悪いと、もう1回、もう1回って。1メートル以上の高さに積むの、小さい体で。
- 何でもビシッとしていないと全部やり直しさせられたね。班全体で。
- 食事に遅れるのがいるわけです。すると、その分だけ食事を減らされる、班全体で。いつもみんなお腹が空いているから、これがいちばんこたえるわけです。
- 先生とか寮母さんは、子どもにとっては、やっぱりこわい存在だったからね。
- 絶対的な君主みたいに感じていたから、ぜんぜん反発なんかしなかったですよ。
- 寮母はそんなことなかったよ。
- 寮母はかわいそうだったことあったなあ、ほくも。
- 他の学校では、みんなで先生をボイコットしたなんて話も聞くけど、大和の場合は、そういう意味では、ずいぶん土地柄のいい、従順なところがあったみたいね。
- でも必ずしもうまくいっていたとは……。
- あらそう、私なんか、すごく頼りにしていたわ。親であり教師であり、



即製の長い机で座学。子どもたちは真剣そのもの
（20年福島県信夫学寮にて 大和国民学校）

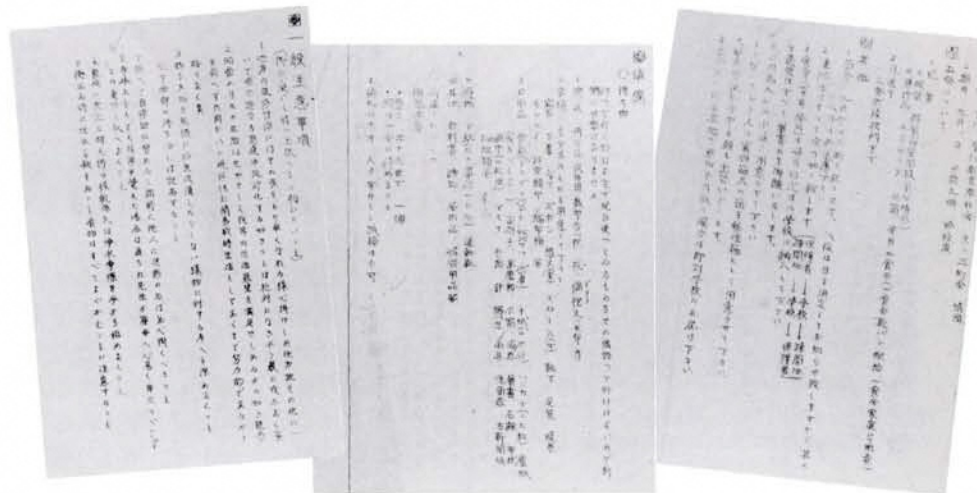
寮母であり。

- まさにその通りなんだけど。
- 今もしね、私たちがああいう事態に追いこまれて子どもたちを連れて行ったとしたら、やっぱり大人の気持は子どもにはわからないと思うの。よかれと思ってしたことがぜんぜん通じないこともあると思う。とにかく一億火の玉、八紘一宇の時代だったんですもの。
- あの当時、私たちの先生は38歳。これは大任ですよ。規則を厳しくしてなるべく問題を起こさないようにしようとするのは当然のことだと思う。特にあんな時代ですもの、班自体で責任を持たせて規律を正そうとしたんですよ。
- でも、あんなに規則を厳しくしなければやれなかったということは、ほ

んとうはちっともまとまっていなかったということじゃないかな。

座り相撲と将棋と金色夜叉

- とにかく暴れたね。畳替えして半日のうちに畳がすり切れちゃうんだから。
- 畳替えなんてしたの？
- 旅館の方で、あんまりひどくなったので替えてくれたんだと思う。それがまた1日で元の木阿弥。座り相撲というのをやるんです、寒くてしょうがないから。座ったまま膝で相撲とるの、背中がついちャダメだから、プロレスだね。これを班ごとに対抗試合やるんです。すると怒られる。怒られる前に荷物など置いてごまかすんだけど、



大和国民学校の「集団疎開の菜」より（19年8月）〈斎藤陸子氏提供〉



“すいとん”、もっとほしい。終戦の年になるとますます食事の量は少なくなった(20年福島県の学寮にて 大和国民学校)



“やつ、ナシの配給だ!”この頃はまだ、こんな配給もあつた。(19年福島県夏井の学寮にて 桃園第二国民学校)〈郷達殖氏提供〉

すぐバレちゃう(笑)。

- ぼくらの油井や小浜ではどんな遊びしたかなあ、イナゴ取りに行ったり、栗拾いに行ったことしか憶えていないんだけど。
- ぼくらはダイヤモンドゲームをよくやったよ。地雷だとか、間諜だとか。
- ぼくはよく軍隊将棋やりました。
- ああ、やりました、やりました。先生を将棋で負かして喜んでいた

なあ(笑)。

- うちの方は娯楽会をよくやりましたね。週に2回。その演し物が、次郎長だとか、私のラバさん曾長の娘。あれやって怒られてね(笑)。
- 油井は、自然に恵まれていたから、阿武隈川に泳ぎに行ったり、安達ヶ原の鬼ばああの遺跡見に行ったり、肝だめしとか。イナゴ取りなどもよかったです。
- 大学生のお兄さんたちの慰問団ね、あれを見に行ったことあるの。その演し物が“金色夜叉”。アコーディオンなんか弾いてブカブカ、それがちっともおもしろくないの(笑)。
- 小学生に金色夜叉じゃね。そういえば小浜の公民館で女剣劇見たことあったなあ。
- 私は忠臣蔵の映画見に行った。
- 映画なんて、ぜんぜん見たことない。休み時間というと栗拾いとノミ取りぐらいで。
- いや、ノミとシラミにはまいったね。
- どちらも縫い目が好きで、もぐってる。それをさがすのが楽しみで(笑)。
- お風呂だって十分入れないし、ましてや髪なんか洗えないんですもの。
- お風呂は、家庭用の小判型、あれに40人位入るんですから、全部入るのに3~4時間かかるでしょ。だから入ったと思ったらすぐ、出る(笑)。
- とうとう女の子何人が坊主にされ

ちゃったね。

- お寺はとくにひどかったですよ。本堂が古畳で、端にノミがずっと並んでいて、軽くボンとたたくとピョンピョン飛び出してくるの(笑)。夜中はバラバラ飛び出す音がする(笑)。
- オーバーね(笑)。
- オーバーじゃない、ほんとうです。

悪戦苦闘の食料獲得作戦

- あのお寺は禅宗でね、その葬式がまた見ものだった。田んぼの畦道をお棺をかついだ黒装束の行列が、わあわあ泣きながら来るの。裏山に埋めるんだけど、それが見たくてね。でもついにそれは見られなかった。ただお葬式があるともらいものがある、これがまた楽しみで。
- その裏山が格好の遊び場だったんですけど、埋葬して1カ月位するとドカンと土が落ちて、雨が降った後は燐が飛ぶんです、夜お手洗いに行くとポッポッ(笑い)。
- あの中山には思い出がいっぱいある。枯小枝をよくしょってきたしね。スズメ蜂にもよく刺されてね。
- スズメ蜂の巣を蹴飛ばすのもいてね、ワッと襲ってくるの。背中に、ゴマ塩みたいにいっぱいくっついて離れない。これにやられると高い熱が出るんですよ。
- あ頃の風呂はみんなが入っている

やさしい父親からの便り



規制の厳しい中にも、温かさいっぱいの便り(大和国民学校)〈斎藤睦子氏提供〉



川遊びには、よく行った。

(20年福島県竹貫村にて 鷲宮国民学校)〈関口保氏提供〉



座り方も立派な少国民たち(19年福島県にて 桃園第二国民学校)〈郷達施氏提供〉

間中、3時間でも4時間でもずーと炊いてなきゃならないから、薪の量は大変なものです。それを山に行って取って来るんだけど、その時へびをつかまえて来て串に刺して、釜の下に入れて焼くんです。こんがりしたのをみんなで分けて食べるの、これがまたうまいの。

- だから風呂当番というのはみんな大喜び。
- あの辺りは、岩がゴロゴロしていて、それをどけると、たいてい5~6匹トグロ巻いていましたね。
- 赤ガエルも食べたね。桑の実も食べた。
- 桑の実ちょっと困るのよ。こっそり食べても、口中真青になるからすぐバレて。
- 何さぼってんだと怒られる。
- 大事にポケットに入れて持つてるとみんなつぶれて服も真青。
- こんなこともあったなあ。夜中に炊事場に行って、おにぎり盗んできて寝床に入ってもごもご。これをまた見つけるやつがいるの、不寝番になって。寝たふりして起きてて、このやろう(笑)。みんなにとられてしまう。
- 干しソバのおやつというのがあったわねえ。ほんの数本だけど。案外おいしいのそれが。
- おやつが出れば立派だよ。出たためしがなかったよ。大豆が6粒くらいのはあったけど。
- たった5粒でも6粒でもみんな下

痢したでしょう。それでも食べたくて。

- 時々、モチ米がごはんの中に入っていることがあって、子どもでもそれはすぐわかる。それだけ取り出して食べたふりして我慢してあとで竹べらで練ってだんごにして寝床でこっそり食べようと。それを風呂に入っている間に誰かにとられちゃって。わんわん泣いてね(笑)。
- とにかくみんなお腹空いてた。
- でも当時の写真見ると、一見栄養よさそうに見えるでしょう。不思議ね。
- 頭がでかいから、そう見えるだけですよ。
- たしかに今の小学校4、5年の子で、こんなに頭ばかり大きくはないわねえ。一種の栄養失調なのね。
- この頭を先生にバリカンで刈られるの、これが痛いですよ。
- 村の床屋にも行くことあるんだけど、自分の石鹼を削って粉にして持つて行くんです。
- あら、どうして？
- 床屋に石鹼がないから。
- ねえ、この写真の座り方、特徴があると思わない？
- 軍国調の座り方なんです。今の若い人はもうこんな座り方できないですよ。
- 班ごとに木刀渡されて、座り方の悪い者はしょつ中たたかかれていたから、座り方は立派なんです。
- 栄養失調も、この頭とこの座り方でカバーしている(笑)。

暑くて重い日、 そしてアメリカ兵

- 終戦の日のことは、今でもはっきり覚えています。ちょうどお昼ごろに村役場に買い出しに行ったら、兵隊さんが村役場の門のところに立っていて、中古のラジオを前にして涙流していた。中から役場のおばさんが出てきて、日本は負けたんだよ、あんたたちもかわいそうだねって。それを帰ってみんなに言ったら、非国民だと総攻撃にありました。誰も負けるなんて思っていないから信じないんです。
- あの日はとにかく暑い日でした。私は薪拾いに行き、松の油をとった後((注)当時重油が不足していたので、松の幹にキズをつけてそこから松の油をとることが広く行われていた)の枝を集めて引きずりながら帰ってきたら、ちょうど町役場の前で、特別な放送があるというのでみんな集まって聞いていました。何か重苦しい言い方で、雰囲気も重いし、松の枝も重いし、何だかみんな重い感じでした。
- 意味も何もわからない。感激も何もない。ましてや涙も流れない。
- ぼくらのところでは、全員がラジオの前に集まって頭を下げて聞いたんです。聞いたんだけど意味なんかわからない。先生が説明してくれて、負けたんだということはわかったけれど、それがどういうことなのかわからない。
- 3日位したら、福島の上空にグラ



子どもたちが帰ってきた時、中野のまちは廃墟同然になっていた。

(20年 沼袋駅前)
 <落合謙次氏提供>

マンが飛んできて、ぐるぐる回っているのに攻撃しないので、ああ戦争は終わったんだなとその時はじめて思いましたね。

- そのうちデマが飛びはじめたでしょう。女の子は全部ハツ裂きにされるって。
- 米軍が上陸してくると福島県が狙われると。本土決戦はこれからだって、竹槍作ったりしましたね。
- 最初、アメリカ兵がジープに乗って通って行くのをカーテンのすき間からそっと見て。
- 何台も何台も長く続いてね。
- 外国人なんて生まれてはじめて見たから、驚いちゃった。天狗のように鼻が高く、おばけのようだと思って。それから時々来るようになって、その度にガムやチョコレートを、ジープで通りすがりにビーなんて口笛鳴らしながら投げてよこすの、子どもがいるから。すると先生が、シャベル持ってきて、パッパッと払い落として、大きな穴掘って埋めるの(笑)。
- 外国人のくれたものを食べると毒が回って死ぬと、みんな信じていたのね。
- 帰りの列車の中で、子どもたちが最初に覚えた言葉が“ハロー”なんです。大宮駅で疎開学童が“ハロー”といったら、どこかの先生にすごく怒られてね。“進駐軍に声かけるな!”。

焼野原の中野に 帰って…

- 高円寺の駅についたら、1年ですごく変わっているのに驚いた。行く前はゴミゴミした街だったのに、何もかもなくなってバァーと広がっていて。
- 帰ってきてもしばらくは疎開の習慣が抜けなくて、食べ物でも全部一度に食べないで、残そう残そうとして、戸棚にしまったり。(笑)
- 帰る直前に、お土産にナシをみんな1個ずつとりなさいといわれて、うれしかったですね。みんな喜んでナシ畑に行って。
- いちばん大きいのをとろうとして、袋をかぶっているナシを1個1個さわってみてね。
- またあの頃のナシはおいしかったわね。みずみずしくて甘くて。
- 帰って来たら、家が狭い感じがしたの憶えてる。こんな小さなところに住めるのかと思っちゃった。
- ぼくは家の中がガランとしていた印象がある。荷物をほとんど疎開させていたからでしょうが、吹きさらしみたいだった。
- 疎開では、子どもたちがくっつき合って生活していたからよ、きっと。
- 何年かして油井へ行った時、あの旅館を見たら、驚いちゃった。あんな小さなところに子どもとはいえ、百数十人が生活していたなんて信じられない位、小さいんです。

- ぼくも9年後に行ったら大きな岩が小さくなって。一瞬、岩がやせたのかと思いましたね。
- 私もこの前、油井へ行って当時の同級生に逢ったら、あの時はいじめるつもりはなかった、許してくれなんてあやまっていましたよ。
- それほど土地の人にいじめられたという記憶はないですね。食べ物がなかったから、しょっ中いじめられているような感情は持っていたと思うけれど。
- 食べてないと人間、考えることまでいやしくなるね。
- まず精神的にダメになりますね。
- たった1年とちょっとだったけど、私にとっては、あらゆる面で貴重な体験ではありました。
- 中学校に入ると、お前ら山ザルだ、山ザルだと言われて。疎開に行ってロクな勉強してないんだから、小学校1年からやり直した、なんて先生にも言われたものです。
- それがずっと尾を引いていて、今だに自信が持てない(笑)。

(了)